

二〇一六年衆議院道五区補選に関する覚書

浅野一弘

1. はじめに

二〇一六年四月二十四日、衆議院北海道第五区選出議員補欠選挙（以下、道五区補選）が実施された。この選挙は、第四七回衆議院議員総選挙（二〇一四年一月二十四日）以降、はじめての国政選挙であるということもあって、大きな注目をあつめた。もつとも、おなじ日、京都三区においても補欠選挙がおこなわれていたものの、こちらの選挙戦では、与党が候補者を擁立できなかったことも手伝って、道五区補選への関心がたかまったといえる。そのためであろうか、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』といった全国紙でさえ、投票日翌日の朝刊に、道五区補選に関する詳細な社説がかかげたほどだ。

さて、道五区補選の結果は、自民党公認候補の和田義明（公明党・日本のこころを大切にす

し、一万二二三・五票差で、無所属の池田真紀（民進党・共産党・社民党・生活の党と山本太郎となかまたち推薦）をやぶつた（図表1）。当日の出口調査の結果では、数ポイント差とはいえ、池田優勢との判断をくだしていた報道機関も複数存在したことから、この選挙結果は、「僅差」でも「大接戦」でもなく、「大敗」であつたとみてよい^①。とはいえ、この数字をもつて、今回の野党共闘が失敗に終わったとは、早計に断じ得ない。なぜなら、二〇一六年夏に予定されている、第二四回参議院議員通常選挙にむけて、今回の選挙戦からは多くの示唆を得ることができるからだ。

そこで、本稿においては、道五区補選の実態を検証してみたい。論述の順序としては、まずはじめに、候補者の第一声に着目し、つづいて、各社の出口調査の結果を紹介する。そして最後に、衆参同日選挙の可能性をめぐって、簡単な私見を述べたい。

2. 第一声からみた両候補

選挙戦において、第一声はきわめて重要な意味をもつ。というのは、告示日当日の第一声に関しては、メディアの注目度もたかく、ひろく報道されるからだ^②。そのため、有権者も、候補者の訴えを容易に知ることができる。

そこで、両候補の第一声の内訳について注目したい。たとえば、『読売新聞』は、北海道版の紙面で、「両候補者は、第一声で何を語ったのか。和田さんは約五分間、池田さんは約一〇分三〇秒をかけて訴えた第一声を内容別に円グラフにしてみた^③」として、両候補の第一声の内訳を示している。残念ながら、具体的な数値は記されていないものの、和田の場合、時間を多く割いた順に、「支援政党、支援者らへの感謝」、「地元への思い、勝利への思い」、「経歴と町村氏の後継」、「決意表明」とつづく。他方の池田は、「生い立ちと経歴」、「政治への市民参加」、「安心社会の実現」、「教育」と

<図表1> 衆議院道5区補選・候補者別得票数

	和田よしあき	池田まき
札幌市厚別区	29,292	33,434
江別市	28,661	29,687
千歳市	25,591	14,439
恵庭市	19,447	13,062
北広島市	13,419	15,200
石狩市	13,103	13,133
市区計	129,513	118,955
当別町	5,023	3,902
新篠津村	1,306	660
石狩振興局計	6,329	4,562
北海道第5区	135,842	123,517

いった順番に時間を割いていた。では、それぞれの項目についてやされた秒数を明示していた『朝日新聞』のケースではどうであろうか。同紙では、和田が五分五秒、池田が一〇分二三秒の時間を第一声にもちいたとしている。円グラフをみると、和田のほうは、「故・町村信孝氏の後継説明」(六〇秒)、「政党、支援者への感謝」(二〇〇秒)、「勝利と恩返しへの思い」(八〇秒)、「地元のために働く決意」(四五秒)、「その他」(二〇秒)となっており、他方の池田は、「生い立ち」(二三〇秒)、「政治を志した理由」(七九秒)、

「介護・福祉の経験」(四五秒)、「政権交代」(四一秒)、「教育」(四〇秒)、「安倍政権批判」(四五秒)、「市民の力」(二二五秒)、「その他」(二八秒)となっている。紙面では記されていないものの、これらに割かれた時間を順に割合で示すと、和田のほうで一九・六七%、三二・七九%、二六・二三%、四・七五%、六・五六%、池田の場合、三六・九二%、一一・六八%、七・三二%、六・五八%、六・四二%、七・二二%、一八・四六%、四・四九%となる(四捨五入の関係で一〇〇%とはならない)。

つぎに、テレビ番組で、第一声の内訳について、円グラフをもちいて図示していた、北海道放送(HBC)と北海道テレビ放送(HTB)のデータに目を転じよう。前者では、和田の第一声(五分二秒)の内訳として、「支援者への感謝」(一分四三秒・三三・〇一%)、「国政への決意」(三分二九秒・六六・九九%)を、池田の演説(一分三七秒)については、「自身の生い立ち」(四分一八秒・四〇・五〇%)、「政治を志すきっかけ」(三分三秒・二八・七三%)、「政策(福祉・安保など)」(二分二秒・一九・一五%)、「決意」(一分一四秒・一一・六二%)をあげていた^⑥。また、後者においては、和田(合計五分)が、「支援者への感謝」(二分五八秒・五九・三三%)、「勝利への思い」(一分三五秒・三一・六七%)、「地域への思い」(二七秒・九・〇〇%)となっていたのに対し、池田(合計九分五四秒)のほうは、「生い立ちと福祉」(五分四一秒・五七・四一%)、「市民の声の重要性」

(二分三八秒・二六・六〇%)、「子供の貧困」(一分三五秒・一五・九九%)であった^⑦。

以上の数値からなかがわかるのか。それは、和田が告示日の第一声において、政策をまつたく語っていないという重大な事実である。現に、北海道テレビ放送の番組のなかでも、「具体的な政策にはふれませんでした」とのナレーションが入っていた^⑧、北海道放送の番組にゲスト出演していた、「国会王子」こと武田一顕も、「これからは、やっぱり町村さんの娘婿だということをやピールすると同時に、自分の政策がどうなのかということがアピールできないと、なかなか厳しいんじゃないかなっていうのがあります」と断じていた^⑨。新聞報道によると、和田がみずからの第一声で、「安保関連法やTPPといった政策課題には触れなかった」のは、「初日は本人の思いの強さを知ってもらう」ため、「政策の話は明日から」との「戦術」であった(陣営幹部)という^⑩。この背景には、第一声に耳をかたむけるのは、たいていが「動員されている人たち」であって、すでに「二度会っている」ため、わざわざ、政策を訴えなかつたという事情もあるようだ^⑪。とはいえ、候補者にとって、もつとも重要な第一声において、みずからの政策を語らないということは、有権者を愚弄する行為といわれてもしかたがないような気がしてならない。

なお、この点に関して、和田は、「選挙戦の最初でありましたので、士気をたかめる、そして

う絶対にがんばる、というふうな、なんていいま
すか、雰囲気づくりというのが大事だというふう
に思つて、最初の第一声のときはああいうふうな
かたちのお話になりました」と弁明していること
を付言しておきたい。

では、他方の池田の第一声についてもふれてお
こう。池田陣営の関係者からは、「特定の層以外
からの支持が見込めなくなる」ため、『シングル
マザーで苦勞』は主張すべきではない」といった
声ももれていた¹³。ほかに、陣営関係者からは、
こうしたやり方が、「一般大衆に受け入れられる
ものからは大きく乖離して」いるとの批判もで
ていた¹⁴。こうした声は、陣営内部からだけでなく、
報道関係者からもさかんに聞かれ、「DVの話な
んかをする、女性の票が逃げていく」と語った
記者もいた¹⁵。こうした見方が存在するように、想
象を絶する家庭環境について語る池田の第一声
は、「両刃の剣」的な要素をもっていたといえよう。
もしかすると、第一声におけるマイナスの側面が、
よりいっそうの無党派層のとりこみを困難なもの
としたのかもしれない。

また、池田の場合、第一声において、「政党が、
市民がつながれば、絶対に負けない」と力説して
いた。だが、無所属を前面におしだす陣営内のよ
このつながり」がうまくいっていないなかったのでは
なからうか。なぜなら、告示日当日の新札幌「カ
テプリ」まえでの街頭演説の折り、「日本共産党」
の文字の入った黄色い巨大メガホンをもった人物

たちが跋扈していたからだ。無所属の候補を応援
するのに、どうして、政党名の書かれたメガホ
ンが必要であつたのか。こうした状況は、新聞で
もとりあげられ、「二二日には、『共産党』と書か
れた黄色のメガホンを持った支持者の姿が見られ
たが、各党が党派色を出さないよう申し合わせて
いただけに、民進党の地元幹部は『約束を守らな
いのは共産党だけだ』と憤り、関係者に注意した」
として、「共闘には結びも見られる」と報じられ
た¹⁶。もつとも、その後、「二二日の告示日には共
産党名が入ったメガホンも見られたが、『選挙に
マイナス』と自粛を決めた」との新聞報道もなさ
れた¹⁷、ときますでに遅しであつた。というのは、
告示日当日のテレビの画面には、「日本共産党」
と書かれた大きなメガホンの映像が色あざやかに
うつしだされていたからだ。

ところで、告示日の両候補の様子を間近にみて
思ったことは、今回の選挙が「格差選挙」である
という事実であつた。これは、両者の家庭環境や
選挙事務所、さらには支持層の相違という意味で
の「格差」だけではない。東京と北海道との意識
の「格差」ということも痛感した。和田陣営の出
陣式には、TBSテレビのカメラが二台きていた。
このことから、今回の補欠選挙に対する東京の
メディアの関心のたかさをかきまわることができ
た。ところが、北海道のある放送局では、告示日
の五日まえになつて、ようやく、選挙特番の実施
をきめたところもあるなど、今回の選挙をめぐつ

ては、さまざまな「格差」を感じる場面が多々あつ
た。たとえば、今回、街頭でインタビューした五
区の有権者の関心がことさらひくかつたことも、
過熱するメディアとの「格差」を物語っていたよ
うな印象を受けた。

3. 出口調査の結果からみた両候補

それでは、一万二二三五票の差で勝敗をけつし
た道五区補選の出口調査に着目してみよう。手元
にあるデータが少なく、ここでの論述は推測の域
をでないが、現時点でいえることを記録として
こしておこう。

まず、注目したいのが、政党支持者別の投票
行動である。『日本経済新聞』に掲載された共
同通信社の出口調査によれば、民進党支持層の
九五・五%、共産党支持層の九七・九%が池田に票
を投じていた¹⁸。札幌テレビ放送の調査でも、池田
は、民進党支持層の九三・七%、共産党支持層
の九三・六%の票をかためていた¹⁹。ところが、
和田の場合、共同通信社の調査では、自民党支持
層の八七・二%を、札幌テレビ放送の調査では、
八六・五%をかためただけでしかなかった。要
するに、自民党支持層の一二%あまりが、池田に
票を投じたのだ。詳細なデータがないため、仮説
の域をでないが、これら一二%は、もしかすると、
節操のない新党大地との選挙協力で拒否反応を示
した層というところからえ方ができるかもしれない。

また、池田は、無党派層の票をどの程度かためたのであろうか。共同通信社の調査では七三・〇%、札幌テレビ放送の調査では六六・一三%の支持をあげたようだ。このほか、『朝日新聞』では六八%²¹、『北海道新聞』では「無党派層からも七割の支持を得た」という数字がでていた²²。いうまでもなく、五七・六三%という低投票率のなかで、無党派層の七割程度しか票をかためきれなかったところが、池田陣営にとつては、大きな誤算であった。

ところで、道五区補選について報じる新聞記事のなかで、気がかりなことがあったので、最後にふれておこう。それは、『日本経済新聞』二〇一六年四月二六日付朝刊四面にある「衆院北海道五区の得票結果の比較」、あるいは、『毎日新聞』二〇一六年四月二六日付朝刊五面に掲載された「衆院北海道五区の候補者得票率」や『読売新聞』二〇一六年四月二六日付朝刊四面の「二〇一四年衆院選と補欠選挙の得票数の比較（北海道五区）」、『北海道新聞』二〇一六年四月二六日付朝刊二五面に「衆院道五区の自民党候補と野党候補の得票率比較」といったグラフである。しかも、『朝日新聞』にいたっては、社説のなかで、「同区は故・町村信孝前衆院議長の地盤だが、野党が一つにまとまっていけば、実は与野党の得票は拮抗していた」とし、「例えば一四年の前回総選挙。町村氏の約一三万票に対し、民主候補約九万五千票、共産候補約三万票と町村氏が大差をつけた。だが、

民主と共産の得票を合計すれば、当選した町村氏との差は約五千票に縮まる」と断じていた²³。

では、どうして、これらのグラフや『朝日新聞』の社説の記述が気になったのか。それは、これら四紙のグラフや社説が、いずれも二〇一四年一月一四日に実施された第四七回衆院選の結果との比較であるからだ。なぜなら、このときの選挙では、新党大地は、民主党と選挙協力を実施しており、北海道五区から立候補した勝部賢志を推薦していた²⁴。ということは、各紙が示している二〇一四年の民主党候補の票のなかには、新党大地の票も少なからずまざっていることになる。にもかかわらず、これらの紙面では、二〇一四年のデータがもちいられていた²⁵。

そこで、新党大地が独自に候補者を擁立していた、第二三回参院選（二〇一三年七月二一日）・選挙区の結果と比較してみよう。このときの選挙には、小川勝也（民主党）、森山佳則（幸福実現党）、伊達忠一（自民党）、森英士（共産党）、安住太伸（みんなの党）、浅野貴博（新党大地）の六人が立候補していた。単純に足し算をすればいいというものでもないかもしれないが、今回の選挙戦の図式にあてはめると、**図表2**のような結果となる。幸福実現党の票数を除外して、得票率に着目すると、補欠選挙での与党側は五四・〇一%で、野党側は四五・九九%となる。しかしながら、和田と池田の得票率はおのおの五二・三八%と四七・六二%で、和田の得票率は三年まえの与党側の数値より

も、一・六三ポイント減少している。このことから、今回の補欠選挙では、野党共闘による一定の成果はあったとみてよい。もともと、民主党との選挙協力をせず、新党大地が単独で名簿を提出した、第四六回衆院選（二〇一二年一月一日）・比例代表のときでいえば、今回の与党側が四九・四六%で、野党側が五〇・五四%となっていたことから、野党共闘にむけては、今後、的確な総括が求められよう（**図表3**参照）。

ところで、投票日翌日の『毎日新聞』の社説には、「この補選が注目されたのは、夏の参院選で民進、共産両党が一人区で進める選挙協力のモデルとなるためだ」と記されていた²⁶。また、『読売新聞』の社説では、「参院選のカギを握る全国三二の一人区のモデルケースと目された」とも論じられていた²⁷。

このように、今回の道五区補選は、二〇一六年夏に予定される第二四回参院選での野党共闘のあり方をうらなう意味でも、大きな注目をあつめていた。だが、先述したように、告示日当日に、無所属候補の応援の場で、「日本共産党」と書いたメガホンが目だつなど、「よこのつながり」がうまくいっていないという事実も露呈するかたちとなった。しかしながら、こうした点も、選挙戦がすすむにつれ、若干、改善されていったようだ。とはいえ、選挙戦が進展してもなお、改善されなかったなにかもあるにちがいない。今回の選挙での対応を迅速かつ詳細に検証することで、第二四

<図表2> 第23回参院選（選挙区）・政党別得票数

第23回(参選)	自民党	新党大地	民主党	共産党	みんなの党	幸福実現党
厚別区	22,323	7,615	16,308	8,011	7,819	461
江別市	19,099	7,069	14,456	7,044	6,304	486
千歳市	22,157	4,021	6,089	2,488	4,091	405
恵庭市	15,495	3,355	6,502	2,427	3,163	287
北広島市	9,788	3,782	7,010	3,266	3,155	258
石狩市	9,458	3,438	5,690	3,333	2,836	264
当別町	3,733	1,266	1,564	1,097	765	148
新篠津村	915	328	263	173	92	24
合計	102,968	30,874	57,882	27,839	28,225	2,333
		133,842			113,946	

<図表3> 第46回衆院選（比例代表）・政党別得票数

第46回衆(比)	自民党	公明党	新党大地	民主党	共産党	維新の会	みんなの党	社民党	未来の党	幸福実現党
厚別区	14,565	6,749	6,510	12,524	5,121	9,487	5,490	1,396	2,508	205
江別市	14,295	6,303	6,276	11,693	4,443	7,401	4,316	1,239	2,003	272
千歳市	17,080	4,771	3,692	5,687	1,423	6,137	2,898	485	1,056	249
恵庭市	12,204	3,726	3,027	5,375	1,529	4,446	2,329	478	822	143
北広島市	6,847	3,232	3,182	5,837	2,161	4,025	2,135	577	1,124	139
石狩市	6,537	3,691	2,994	4,821	2,112	3,600	1,980	538	822	130
当別町	2,871	1,072	1,088	1,411	831	1,066	576	136	299	46
新篠津村	933	160	260	251	110	112	81	33	40	9
合計	75,332	29,704	27,029	47,599	17,730	36,274	19,805	4,882	8,674	1,193
			132,065						134,964	

4. 結び―衆参同日選挙の可能性―

回参院選での野党共闘にとつて有益な教訓をひきだすことができるのではなからうか。また、そうした作業をおこなうことこそ、今回の選挙にかかわった者たちの責務といつても過言ではない。

周知のように、「安倍首相は衆院北海道五区補選の勝敗を踏まえ、次期衆院選と夏の参院選を同じ日に行う『衆参同日選』に打って出るかどうかを判断する構え」との報道がなされていたことも手伝つて、今回の道五区補選は、多大な関心をあつめた。

突然ではあるが、ここで、当確の報を受けて万歳をした和田の真横に陣取っていた新党大地・代表の鈴木宗男の胸中を察して、衆参同日選挙の可能性を探ってみよう。

鈴木は、「自らの公民権停止が来年（二〇一七年）四月に解けた後の対応について『一番早い国政選挙に挑戦したい』と述べ、衆院選か参院選に立候補し、国政に復帰する意欲を表明した」（カッコ内、引用者補足）という。②③ ということは、二〇一六年の夏に、衆参同日選挙がおこなわれてしまった場合、衆議院議員のバッジをねらう鈴木の大立候補はまださきのこととなってしまう。可能性としては、ひくいものの、参議院議員へのくらがえをするとしても、二〇一九年まで待たなければならぬ。そう考えると、今回、和田の勝利に貢献したと自

負する鈴木としては、安倍に多大なプレッシャーをかけつづけるにちがいない。このように、鈴木を意向を中心に予測すると、衆参同日選挙はないという見方がなりたつ。しかしながら、安倍にとつて、衆参両院で三分の二以上の議席を獲得することこそが至上命題であり、衆参同日選挙の判断をくだすにあたつて、鈴木一人の意向に左右されることはまずないといつてよからう。

ところで、政治家という生き物は、できうるかぎり、後世にみずからの名をのこそうとするのがつねである。衆参同日選挙の話題がでるたびに、メディアでは、「任期は四年だが解散で不定期に行われることが多い衆院選と、三年ごとに半数が改選される参院選が行われた例は、過去に二度しかない。一九八〇年の大平正芳首相と、八六年の中曽根康弘首相(いずれも当時)の時に」といった具合に、ときの権力者の名前が報じられる。①ということは、安倍が衆参同日選挙を決断した場合、二〇一六年七月の安倍内閣時に実施された衆参同日選挙以降、四度目の衆参同日選挙」といった報道が、将来なされることとなるのだ。しかも、二〇一六年四月一八日の時点で、安倍の首相通算在任期間は一五七六日にたつし、歴代五位となった。②今後、安倍がこの記録をのぼしていきたいと考えているのは想像に難くない。だからこそ、最高のタイミングをみすえ、衆参同日選挙に打つてでる可能性は大いにあり得るといわけだ。③

そのうえ、五月二六・二七日には、三重県において、G7伊勢志摩サミットが開催される。ちなみに、「国内で開催されるサミットは、首相が各国首脳を前に議長として会議を取り仕切る晴れ舞台だけに、政府・与党は政権浮揚効果を期待する」もので、日本の「国内開催は過去五回」あつたが、その「うち四回、その年に衆院が解散されている」という歴史がある。④

こうした事実をふまえて考えてみると、衆参同日選挙の可能性はきわめて大きいといわざるを得ない。ただ、安倍の判断を左右する大きなポイントには、熊本地震にともなう震災関連死をくいとめることができるかどうかにかかっているとつてもよからう。ここでの対応をあやまると、衆参同日選挙どころか、政権の命とりにもつながりかねない。

衆参同日選挙の有無が注目をあつめるなか、ゴールデンウィーク中に外遊をした安倍は、同行記者団に「解散の『か』の字も考えていない」と語つたという。⑤安倍が解散の「か」の字も考えていないとすれば、「かいさん」の四文字のうち、のこるは、「いさん」＝遺産＝レガシーだけである。安倍のこの発言には、中曽根康弘内閣以来の衆参同日選挙にふみきり、憲法改正という遺産をのこそうといった隠された意味があるような気がしてならない。われわれは、第二四回参院選の実施をまえにして、いま一度、そうした安倍の「ほんとうの顔」を凝視する必要があるのではなからうか。⑥

【注】

- (1) 関係者へのインタビュー(二〇一六年四月二日および二〇一六年五月五日)。
- (2) 投票日翌日の「日本経済新聞」は、「北海道五区、与党接戦制す」(傍点、引用者)との見出しをかがけていた(『日本経済新聞』二〇一六年四月二五日、一面)。

- (3) くわしくは、浅野一弘「第一声からみえる候補者の『争点化力』」(『北海道自治研究』二〇一五年六月号所収)を参照されたい。
- (4) 『読売新聞』(北海道版)二〇一六年四月一三日、三五面。

- (5) 『朝日新聞』(北海道版)二〇一六年四月一三日、二八面。
- (6) 「今日ドキッ!」(北海道放送(HBC))

- (7) 「イチオシ!」(北海道テレビ放送(HTB))
- (8) 同上。

- (9) 前掲、「今日ドキッ!」(北海道放送(HBC))
- (10) 『朝日新聞』(北海道版)二〇一六年四月一三日、二八面。

- (11) 関係者への電話によるインタビュー(二〇一六年四月一三日)。
- (12) 「言わせて!道五区補選」(札幌テレビ放送(S

TV) (二〇一六年四月二四日)。

(13) 関係者からの電子メールによる回答 (二〇一六年四月七日)。

(14) 関係者からの電子メールによる回答 (二〇一六年四月八日)。

(15) 関係者へのインタビュー (二〇一六年四月二四日)。

(16) 『読売新聞』二〇一六年四月三日、三面。

(17) 『毎日新聞』二〇一六年四月二〇日、五面。

(18) 関係者へのインタビュー (二〇一六年四月二五日)。

(19) 『日本経済新聞』二〇一六年四月二五日、二面。

(20) 前掲、「言わせて！道五区補選」(札幌テレビ放送 (STV)) (二〇一六年四月二四日)。

(21) 『朝日新聞』二〇一六年四月二五日、二面。

(22) 『北海道新聞』二〇一六年四月二五日、二面。

(23) 『朝日新聞』二〇一六年四月二五日、八面。

(24) 現に、当時の勝部の戦いについて、「民主党への風当たりが弱まってきたことに加え、新党大地との選挙協力による後押しもあった」とする民主党関係者の見方があったほどだ(『北海道新聞』(札幌近郊版)二〇一四年二月一六日、三二面)。

(25) もっとも、『朝日新聞』も、二〇一二年衆院選、「二四年衆院選」、「北海道五区補選」の三回の選挙の野党側の票数を合算した「野党連携の結果と今後」と題する図を掲載しているが、民主党と新党大地が選挙協力をしなかった二〇一二年二月一六日の第四回衆議院議員総選挙の数値があるため、若干の比較が可能といえよう。

(26) 『毎日新聞』二〇一六年四月二五日、五面。

(27) 『読売新聞』二〇一六年四月二五日、三面。

(28) 同上、二〇一六年四月一三日、三面。

(29) 『北海道新聞』二〇一六年三月一三日、四面。

(30) ちなみに、「衆院は平均二年半で解散がある」とされる(『朝日新聞』二〇〇四年八月五日、四面)。

(31) 『朝日新聞』二〇一六年四月一〇日、二面。

(32) 『毎日新聞』二〇一六年四月一九日、五面。

(33) 衆参同日選挙の可能性をうらなううえで、過去二回の衆参同日選挙のときとくらべ、選挙制度が変わっていることにくわえ、自民党は、公明党と連立政権をくんでいるといった事情も、考慮に入れる必要がある。

(34) 『毎日新聞』二〇一六年一月七日、一〇面。

(35) もっとも、「政権の狙いが当たったケースは、『死んだふり解散』と呼ばれ、衆参同日選となった一九八六年の中曽根康弘首相だけ」で、一九七九年、一九九三年、二〇〇〇年の三回は、首相の思うような結果をだすことができなかったようだ。なお、〇八年の福田康夫首相は『サミット後解散』を模索したが、踏み切れないまま辞任した」ことを付言しておく(同上)。

(35) 『読売新聞』二〇一六年五月三日、四面。ただ、一九八六年七月六日の衆参同日選挙の可能性をめぐって、「中曽根首相も直前まで『解散は考えていない』と断言」し、『同日選なし』が支配的になったところで解散を打ち、『死んだふり解散』と呼ばれた「事実を忘れてはならない(『毎日新聞』二〇一六年四月一八日(夕)、二面)。

(36) 安倍の「ほんとうの顔」については、たとえば、

浅野一弘『現代政治論―解釈改憲・TPP・オリビックス』(同文館出版、二〇一五年)、一四九―一五二頁を参照されたい。

↑あさの かずひろ・札幌大学法・政治学系教授↓